

二 青年教育におけるグループ活動の効果

吉 川 弘

(新潟大学)

1 グループ活動の活発化

表1は、文部省調査による年次別青年団体加入者数である。地域青年団員が激減し、目的青年団体（ここでは全国組織をもつ青年団体、例えばYMCA、YWCA、4Hクラブ、ユースホステル協会等をとらえている）員も減少している。そして、昭和49年度からグループ（ここでは30人ぐらい以下の小集団組織を指している）員がかなりの数登場している。これ以前にグループが存在しなかったということではあるまい。このころから調査統計上グループが見落とすことができない存在になってきたということであろう。このことは、都道府県や市町村で実際に青年団体

と接しているとよくわかる。特に市街地においては、このグループ・サークルの存在が大きくなっている。これを具体的に新潟市青年の家を常時利用している青年団体にみてみよう。（新潟市青年の家では常時利用する青年団体は届出を求め……これを登録といっている……便宜を提供し

表1 青年団体加入者数

年度	地域青年団体	目的青年団体	グループ・サークル
	人	人	人
30	1,848,300		
35	1,873,300	584,300	
39	957,000		
42	795,400		
46	618,100	413,000	
49	510,300	225,800	309,500
51	494,300	237,400	239,200
52	489,000	270,800	257,400

資料：文部省「青少年教育の現状」

ている)

表2は、新潟市青年の家の利用青年グループ・サークルの数とその加入者である。グループ平均でみると30人未満の小集団である。

このように、青年団体活動について考える時、いまやグループ（小集団青年団体）の存在を見過ごすことはできなくなっているのである。

表2 青年の家利用グループの状況

昭和52年度				昭和54年度			
学習・研究グループ	団体 20	人 299		学習・研究グループ	団体 29	人 642	
音楽・芸術	〃	20	392	趣味	〃	28	613
職場・職域	〃	8	85	スポーツ	〃	13	467
趣味	〃	34	1,205	総合・一般	〃	21	433
スポーツ	〃	12	398	奉仕活動	〃	2	46
社会奉仕	〃	10	147	その他の	〃	25	553
その他の	〃	16	640				
計		120	3,166	計		118	2,754
1グループ平均人数			26	1グループ平均人数			23

資料：新潟市青年の家「利用サークル一覧表」から

生涯教育が説かれ、人々は生涯を通じ、あらゆる機会、あらゆる場において学習するようになってきている。その状況は、各種の調査によっても示されており、人々の学習率（学習している者の全体に対する割合）は高まっている。⁽¹⁾その学習は、マス・メディアの発達普及もあって、一人ひとりが個々に学習する個人学習がさかんになっている。いままでは、集合学習が重視されすぎたきらいがあり、これからは、個人学習こそ促進される必要があるとの論も展開されている。⁽²⁾今日のように、都市化、工業化、情報化が著しくすすんでいる社会においては、多くの人が学ぶには個人学習が適する面がある。しかし、個人学習にも問題がある。情報を交換したり、研究討議の中で学習を深めたり、励まし合って意欲の向上を図るといような点では相互学習（集合学習）にはかなわない。⁽³⁾集合学習には多くの効果面が期待されるのである。

青年教育における集合学習としては、青年学級、青年教室等があるが、青年団体活動も主要なものといえる。青年学級、青年教室等が主として市町村

教育委員会によって開設されるものであるのに対して、青年団体活動は青年たちの自発性、自主性に基づいて行われるところに特質がある。青年の主体性発揮が困難といわれる今日、この特質を生かした青年団体活動の促進が重視される必要が大いにある。

さて、青年団体活動の促進であるが、従来から存在する地域青年団、目的青年団体は減退しており、そのすう勢を挽回することは難しい。近年、非常に活発化しているグループにこそ注目すべきではなかろうか。では、このグループの実態はどうなっているのであろうか。グループ活動は青年教育上どのように位置づけられるのであろうか。前者については述べられているものもある。⁽⁴⁾ここでは特に、後者について考えていきたい。それには、グループ活動がどのような効果を発揮しているのか、調査によって明らかにし、その結果をもって、グループの育成、ひいては青年教育の振興を考えることである。

2 青年グループ活動調査

このような考えから、このたび新潟県内の新潟市、白根市において調査を行った。新潟市、白根市を選んだ理由であるが、まず、町村部においては現在も地域青年団が根強く存在しており、グループは主に市街地およびその周辺に存在すること、また、グループは活動拠点として都市青年の家（青年センター）を利用しており、新潟市には青年の家（都市型）、白根市には青年教育センター（同じく都市型）があることによる。

ア 調査対象

新潟市青年の家を利用する青年グループは表2にみるとおりである。この類別青年グループの数を考慮し、調査対象の青年グループ数を決め、利用団体名簿から無作為に選びだした。白根市の場合も新潟市同様、利用青年グループの状況に対応させてグループを選出した。そして、これらグループに対し、代表を通じグループ員に調査票を配布、回収した。選出したグループ数、調査票配布、回収数、回収率は表3の通りである。

表3 新潟市、白根市の調査対象グループの調査票配布数、回収数および回収率

調査対象グループ	新潟	白根
学習グループ	4	6
地域 //	0	4
職場職域 //	1	0
趣味 //	12	4
スポーツ //	6	2
奉仕 //	2	0
その他の //	7	0
計	32	16
調査票配布数	289	250
// 回収数	228	182
(回収率)	(78.9)	(72.8)

イ 調査期日

昭和55年6月

ウ 調査項目

- ・グループの組織、会員数、設立以後の年数、主な活動内容、当面している問題
- ・会員の加入動機、加入年数、役職従事状況
- ・グループ活動で得たこと、活動継続の意思とその理由

さて、ここでは調査の結果に基づき主に添って、青年のグループ活動の効果

(グループ活動で得たこと)を明らかにすることを目的とするが、その前に、青年たちがグループにどのような期待(加入の理由)をもってグループ活動に参加しているかを概観しておこう。

3 グループ活動への期待

表4は、性別、年齢別、職業別グループ加入の理由である。まず、全体的にみると、最も多いのは、いろいろな人と交流し、考え方や行動のし方について学ぶということである(46.1%)。ついで、友だちがほしい(32.9%)、趣味をひろげる(25.6%)、気分転換・娯楽(24.6%)、人にさそわれて(21.5%)、異性との交流・交歓(21.2%)などとなっている。

性別にみると、男女ともあまり大きくはかわらないが、男に、異性との交流・交歓をあげるものが多くあり、女に、さそわれて、というものが多くなっている。

年齢別では、各年齢層とも、いろいろな人と交流したいというものがほぼ同じ割合で第1位である。若年層に多いものとしては、友だちがほしい(15～

表4 グループ加入の理由

(%)

		友だちがほしい	気分転換・娯楽	からだをきたえる	仕事や日常生活に役だつ知識・技術の習得	異性との交流・交歓	社会のために役だちたい	教養を高める	趣味をひろげる	地域のことを知りたい	いろいろな人との交流	なにかやってみたい	ただなんとなく	さそわれて	その他の	回答者数
全 体		32.9	24.6	15.1	9.5	21.2	6.3	12.9	25.6	4.1	46.1	17.1	6.8	21.5	5.1	410
性	男	30.0	24.9	17.3	11.8	24.5	9.3	14.8	26.6	5.5	45.6	16.0	7.6	17.7	3.0	237
	女	37.0	24.3	12.1	6.4	16.8	2.3	10.4	24.3	2.3	46.8	18.5	5.8	26.6	8.1	173
年 齢	15～18歳	17.5	25.0	17.5	5.0	25.0	2.5	15.0	20.0	0.0	45.0	10.0	7.5	27.5	2.5	40
	19～20	43.9	30.8	12.1	9.3	30.8	8.4	17.8	25.2	7.5	46.7	21.5	14.0	34.6	1.9	107
	21～22	39.6	30.8	14.3	14.3	29.7	5.5	4.4	28.6	4.4	50.5	17.6	5.5	26.4	1.1	91
	23～25	34.1	19.5	15.9	9.8	9.8	2.4	9.8	22.0	0.0	45.1	23.2	3.7	11.0	14.6	82
	26歳以上	18.9	15.6	17.8	6.7	10.0	10.0	17.8	28.9	5.6	42.2	8.9	2.2	7.8	5.6	90
職 業	勤め人	34.1	24.1	14.9	8.8	21.3	6.0	10.4	28.1	4.4	46.6	19.3	6.4	22.5	4.0	249
	自営業	37.7	20.8	20.8	18.2	23.4	5.2	14.3	16.9	5.2	45.5	13.0	9.1	23.4	5.2	77
	在 学 生	21.4	33.3	9.5	4.8	23.8	7.1	19.0	26.2	2.4	52.4	16.7	7.1	14.3	4.8	42
	無 職	11.1	33.3	22.2	0.0	11.1	0.0	11.1	22.3	0.0	22.2	22.2	0.0	55.6	0.0	9
	そ の 他	35.5	22.6	9.7	3.2	9.7	12.9	16.1	23.8	3.2	45.2	9.7	3.2	9.7	16.1	31

18歳はそれほどでないが)、気分転換・娯楽、異性との交流・交歓、さそわれて、ただなんとなくがあり、高年齢層では、趣味をひろげる、なにかやってみたい、がやや高いというところである。

ついで職業別であるが、在学生に、気分転換・娯楽、いろいろな人と交流したい、をあげるものの多いのは興味深い。気分転換・娯楽は、勉強疲れをいやそうとするものか、また、いろいろな人と交流したい、は学内だけの友人からもっと輪を拡げたいということであろうか。また、在学生と在学生以

外とを比べると、在学生以外の者に、友だちがほしい、からだをきたえる、というものが多い。学校を離れることにより、友だちが得にくくなるということか、また、体育の時間などがなくなり、身体活動の機会が少なくなるということであろうか。

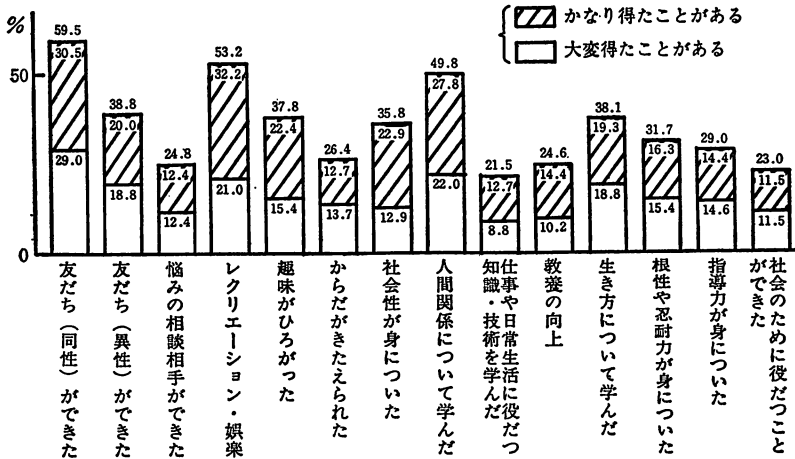
ところで、これらの理由を、個人の成長につながるもの（個人的）と、他とのつながりを求め社会に自己を向けていこうとするもの（社会的）とに大きく区分してみる。個人的なものとしては、気分転換・娯楽、からだをきたえる、仕事や日常生活に役だつ知識・技術の習得、教養を高める、趣味をひろげる、をとり、社会的なものとして、友だちがほしい、異性との交流・交歓、社会のために役だちたい、地域のことを知りたい、いろいろな人と交流したい、をとる。両者の総和を比較すると、87.7対110.6で、社会的なものの方が強いことがわかる。グループ活動に対しては、個人の成長を求めることももちろんであるが、社会とのつながりの中に自己を発揮していこうとするねがいが強く存すると解してよいのではなかろうか。

4 グループ活動の効果

では、青年たちは、グループ活動でどのような成果を得ているのであろうか。図1は、青年たちのグループ活動で得たことがあるとする者の割合を得たことの内容別に表したものである。割合が最も多いのは、友だち（同性）ができたとするものである（59.5%）。次は、レクリエーション・娯楽（53.2%）、そして、人間関係について学んだ（49.8%）である。以下、友だち（異性）ができた、生き方について学んだ、趣味がひろがった、社会性が身についた、根性や忍耐力が身についた（以上3割を越えるもの）、指導力が身についた、からだをきたえられた、悩みの相談相手ができる、教養の向上、社会のために役だつことができた、仕事や日常生活に役だつ知識・技術を学んだ（いずれも2割以上）、となっている。これらを「グループ活動への期待」のところでまとめてみたように、個人的なもの（レクリエーション・娯楽、趣

味がひろがった、からだがきたえられた、仕事や日常生活に役だつ知識・技術を学んだ、教養の向上、生き方について学んだ、根性や忍耐力が身についた)と社会的なもの(友だち——同性——ができた、友だち——異性——ができた、悩みの相談相手 ができた、社会性が身についた、人間関係について学んだ、指導力が身についた、社会のために役だつことができた)にわけて総和を求めてみると、233.3対260.7となる。社会的なもののほうが大きい。グループ活動からは、個人の成長に役だつものも多く獲得されるが、それ以上に社会的なもの、すなわち、社会とのつながりの中で自己を見出し、自己を発揮していくことの活動成果が得られているといえよう。青年のグループ活動への期待においても社会的なものを求めるものが多く、また、活動の成果としても社会的なもののほうが大きいということは、グループ活動の存在意義が、青年の社会的発達につながるということにあるといつてよからう。

図1 グループ活動で得たこと



さて、グループ活動の成果を男女別(表5)にみてみよう。男子で、得たことがあるとする者の割合の多いのは(3割以上)、友だち(同性)ができた、レクリエーション・娯楽、人間関係について学んだ、趣味がひろがった、生き方について学んだ、社会性が身についた、友だち(異性)ができた、指導力が身についた、根性や忍耐力が身についた、教養の向上の順である。これに対し、

女子の3割以上のものとしては、友だち（同性）ができた、レクリエーション・娯楽、人間関係について学んだ、生き方について学んだ、趣味がひろがった、社会性が身についたである。順序は男女ともあまりかわらないが、3割以上でみると、男子のほうに得たことがあるとする者の割合が大きい。また、男女にひらきのあるものとしては、趣味がひろがった（男41.3、女32.9）、社会性が身についた（男39.6、女30.7）、仕事や日常生活に役だつ知識・技術を学んだ（男25.7、女15.6）、教養の向上（男30.0、女17.3）、指導力が身につ

表5 グループ活動で得たこと

(%)

		友だち（同性）ができた	友だち（異性）ができた	悩みの相談相手があった	レクリエーション・娯楽を得た	趣味がひろがった	からだがきたえられた	社会性が身についた	人間関係について学んだ	仕事や日常生活に役だつ知識・技術を学んだ	教養の向上	生き方について学んだ	根性や忍耐力が身についた	指導力が身についた	社会のために役だつた	回答者数
全 体		59.5	38.8	24.8	53.2	37.8	26.4	35.8	49.8	21.5	24.6	38.1	31.7	29.0	23.0	410
性	男	57.8	38.8	25.8	50.6	41.3	27.9	39.6	50.3	25.7	30.0	41.0	35.5	38.4	29.9	237
	女	61.9	38.7	23.7	56.6	32.9	24.1	30.7	49.1	15.6	17.3	34.1	26.6	16.2	13.3	173
年 齢	15～18歳	40.0	17.5	10.0	47.5	27.5	32.5	22.5	27.5	10.0	20.0	27.5	27.5	7.5	12.5	40
	19～20	50.4	37.4	17.7	47.7	26.1	21.5	30.8	51.4	18.7	18.7	28.1	23.3	43.3	16.8	107
	21～22	67.1	42.9	23.1	66.0	40.7	23.1	35.2	48.3	18.7	20.9	37.4	28.6	34.1	24.2	91
	23～25	59.8	37.8	28.1	50.0	42.7	28.0	36.6	53.7	22.0	24.4	41.5	30.5	26.9	20.7	82
	26歳以上	71.2	46.7	38.9	52.3	48.9	31.1	47.8	55.6	32.2	37.8	52.2	47.8	42.3	35.5	90
職 業	勤め人	62.6	43.4	25.7	55.8	41.0	25.7	40.6	55.4	22.1	26.5	41.4	33.0	31.8	24.1	249
	自営業	61.1	29.9	26.0	48.1	31.2	27.3	31.2	33.8	26.0	24.7	32.5	33.8	32.5	26.0	77
	在学学生	45.3	30.9	23.8	45.2	40.5	30.9	23.8	50.0	11.9	23.8	31.0	33.3	16.7	16.6	42
	無職	44.1	11.1	0.0	66.6	11.1	44.4	33.3	55.5	0.0	11.1	11.1	11.1	0.0	0.0	9
	その他	54.9	45.2	25.8	54.8	32.3	19.3	29.1	45.1	25.8	16.2	45.2	22.6	16.1	22.6	31

いた(男38.4, 女16.2),社会のために役だつことができた(男29.9, 女13.3)があげられる。

年齢別にみると,からだがきたえられた,を除いて,いずれも年齢が高まるに従って得たことがあるとする者の割合が高まっている。特に20歳以下の者と21歳以上の者との間で大きなひらきがみられるものとして,友だち(同性)ができた,悩みの相談相手ができた,趣味がひろがった,社会性が身についた,生き方について学んだ,指導力が身についた,社会のために役だつことができた,があげられる。このように,グループ活動で得たことがあるとする者の割合が年長青年に多いことが指摘できるが,若年層にグループ活動の効果が薄いと決めてしまうには問題があろう。むしろ,若年層では,グループ活動の日も浅く,グループ活動の効果を認識できないのではなかろうか。

ついで,職業別であるが,在学生と勤め人を比べてみると,からだがきたえられた,根性や忍耐力が身についた,を除き,勤め人のほうに得たことがあるとする者の割合が高い。このこと以外には,職業別で大きなひらきがみられるのは,無職者のレクリエーション・娯楽,からだがきたえられた,が他よりも高い割合であるとともに,友だち(異性)ができた,悩みの相談相手ができた,趣味がひろがった,仕事や日常生活に役だつ知識・技術を学んだ,教養の向上,生き方について学んだ,根性や忍耐力が身についた,指導力が身についた,社会のために役だつことができた,の割合が極めて低いことがあげられる。無職者の人数が少ないことから,問題にしなくてもよいことかと思うが,ひらきが大きい。

5 グループ活動促進上の視点

4. において,グループ活動参加者の属性からグループ活動の効果をみてきたが,属性以外の諸要素からグループ活動の効果をみてみよう。グループ活動を促進するには,グループ活動を構成している諸要素を操作することが考えられる。さきの参加者の属性を操作することもある。例えば,男女いず

れかに、または、年齢を一定範囲に限るというようなこと、在学者のみにするとか、在学者を除くとかということもできよう。しかし、これら属性以外にもグループ活動を構成する諸要素がある。むしろ、ここでは、このことに注目したい。

(一) 加入年数とグループ活動の効果

図2・3は加入年数別にみたグループ活動で得たことがあるとする者の割合である。図2は、そのうちの個人的なもの、図3は社会的なものである。グラフが錯綜することあって分けてみた。個人的なもののほうで、レクリエーション・娯楽を除いてすべて加入年数が長くなるに従い、グループ活動で得たことがあるとする者の割合が高くなっている。社会的なものについては、すべてが加入年数が長くなるにつれて高くなっている。また、個人的なもののほうは、1年未満と1～2年でほとんどかわらない（むしろ下るものもある）が、2～3年以上になるとその割合が高まっていく。少なくとも2～3年以上グループ活動がつづけられないと効果が得られないといえる。ところで、個人的なものと社会的なものを見比べてみると、社会的なもののほうが、加入年数による得たことがあるとする者の割合の高まり方が大きいことがわかる。なお、レクリエーション・娯楽は、2～3年までは高まるが、それ以後は下降する。グループ活動がレクリエーションや娯楽のうえで効果的なのは、この辺が頂点で、2～3年を越えると関心は目的的なものに移っていくといえよう。（レクリエーション・娯楽が全く無目的とはいえないからうが）

いずれにしても、グループ加入年数が長いほどグループ活動で得たことがあるとする者の割合が高い（もっともただ加入しているということでは意味はなからう。このことについては後ほどふれる）ことは、今後、グループ活動を促進する上で重要な視点であると思われる。要は、活動をつづける（場合によってはつづけさせる）ことが、グループ活動の効果を生みだしていくことにつながるということである。

図2 加入年数別グループ活動で得たこと（個人的なもの）

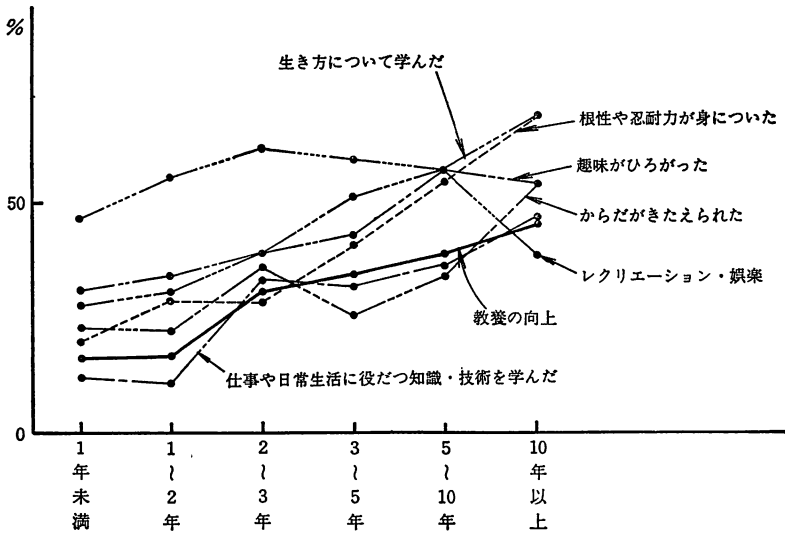


図3 加入年数別グループ活動で得たこと（社会的なもの）

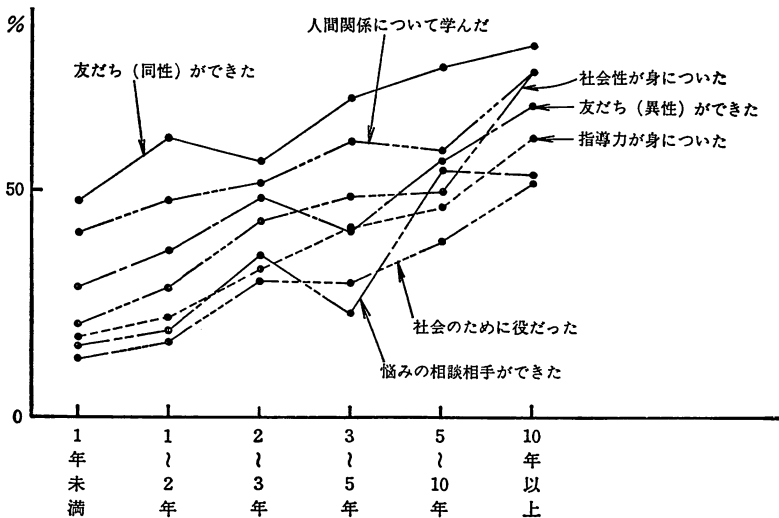


図4 規模別グループ活動で得たこと（個人的なもの）

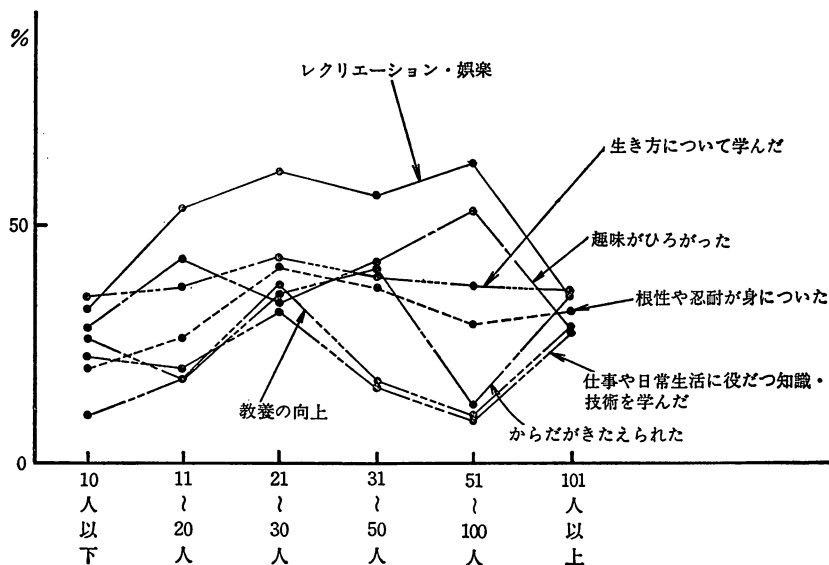
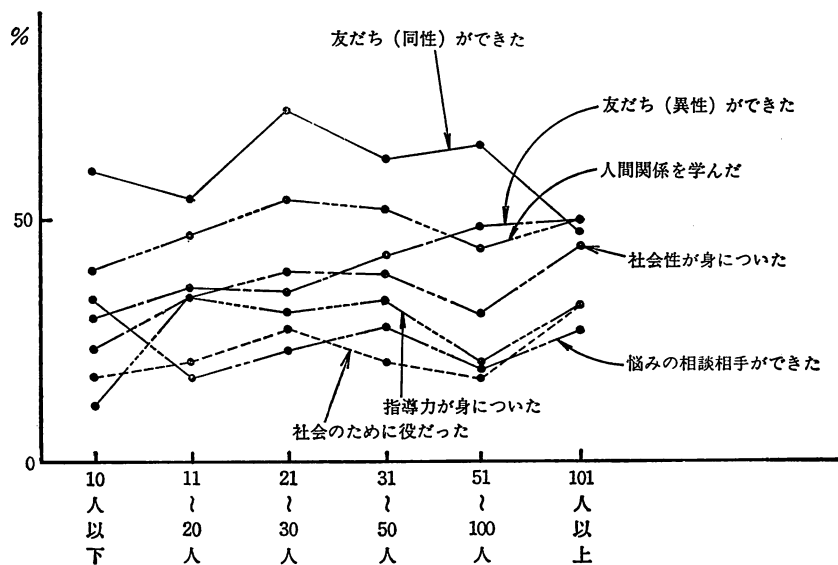


図5 規模別グループ活動で得たこと（社会的なもの）



(二) グループの規模とグループ活動の効果

図4・5は、グループの規模別にみたグループ活動で得たことがあると答えた者の割合である。これをみると、全体的傾向としては、グループ活動の効果は、グループの規模が大きくなるに従い高まるものではない。個人的なものからみていこう。趣味がひろがった、を除いて、いずれも人数が30人以下の場合はグループの規模の増に従って効果も高まっている。10人以下という非常に限られた人数では効果が薄いということであろう。人数が31人以上になると様子が変わる。レクリエーション・娯楽、趣味がひろがった、は100人ぐらいいまで上昇するが、他は下降する。また、101人を越えるとレクリエーション・娯楽は下降し、むしろ、教養の向上、からだがきたえられた、仕事や日常生活に役だつ知識・技術を学んだは再び上昇する。以上から、個人的なものについては、30人ぐらいいまでは、人数の増加に従って効果も期待できるということであろう。

次に、社会的なものであるが、こちらも30人ぐらいいまでは、大体いずれもが上昇している。そして、31人を越え100人までは、人間関係について学んだ、を除いてその効果が減じていく。だが、その減じ方は、個人的なものほど急激ではない。そして、101人以上になると、全体的に再び上昇する。社会的なものは、個人的なものに比べ、人数が多くなっても、人とのふれあいがひんばんになり、それなりの効果が期待できるということであろう。しかし、友だち(同性)ができた、とする者は、30人を境に人数が増大するにつれて下降する。人数がふえると、それだけ接触が薄くなり、親しくなれないということと解される。

以上から、グループの規模とグループ活動の効果について述べれば、グループの人数は30人ぐらいいが最も効果をあげやすいということ、特に、それは、個人的成長につながる活動において顕著であり、極端にいえば、個人的成長を求めるものについてはグループの規模は30人にとどめたほうがよいともいえる。(社会的なものを求める場合は、その人数はもう少し大きくなってよい)

(三) グループの組織範囲とグループ活動の効果

グループの組織を同一学校内、同一職場・職域（同業者）、同一地域、そしてこれらを越えた同好者の集まり、その他に類別してグループ活動の効果をみたのが表6である。ほとんどにおいて、学校、職場・職域、地域を越えた同好者の集まりで、グループ活動で得たことがある者の割合が高い。グループを組織するに、活動目的・内容に関する同好・同志の一点においた組織のほうが、同一学校、同一職場・職域、同一地域の組織より（これらも同好者の集まりであることにはちがいはないのであるが）効果をあげていることは注目される。

表6 グループ組織別グループ活動で得たこと

(%)

	友だち できた (同性) が	友だち できた (異性) が	悩みの 相談相手 が	できた レクリエーション	興味 がひろがった	からだ がきたえら	社会性 が身につい	学んだ 人間関係 について	仕事を 学んだ 日常生活 技術に	教養 の向上	生きた 方について	根性や 忍耐力が 身につい	指導力 が身につ	社会 のために 役だ
学校内組織	42.9	35.7	14.2	35.7	14.2	7.1	28.5	35.7	28.6	28.5	42.9	50.0	21.4	7.1
職場職域の "	46.2	23.1	15.4	46.2	23.1	23.1	46.2	38.5	46.2	44.2	30.8	15.4	36.5	30.8
地域の "	56.1	39.0	17.6	47.9	25.7	27.7	28.4	43.2	18.9	18.9	30.4	23.7	20.9	17.6
同好者 "	64.6	47.2	31.1	58.8	48.8	26.8	42.1	57.9	22.0	27.7	45.4	39.3	34.4	28.2
その他	45.0	30.0	25.0	50.0	40.0	30.0	20.0	30.0	15.0	15.0	15.0	10.0	35.0	10.0
計	59.5	38.8	24.8	53.2	37.8	26.3	35.8	49.8	21.5	24.6	38.1	31.7	29.0	23.0

学校内組織において他より割合の高いものには、根性や忍耐力が身についた、とするものがあり、職場・職域の組織では、仕事や日常生活に役だつ知識・技術を学んだ、がある。地域の組織は、他に比べて割合の特に高いものはない。

このことから、グループの組織を考える場合、目的・目標に関する同好・同志の者を、しかも学校とか、職場・職域とか、地域とかに限定しないで構成していくことがグループ活動の促進策としてあげられる。

(四) 目的保持者とグループ活動の効果

図6は、グループ加入の理由別に、その理由に関連が深いと考えられる活動効果を得た者の割合を示したものである。具体的に述べれば、友だちがほしいという理由でグループに加入した者のうち、グループ活動の結果友だち（同性）ができたとする者が74.8%あるということである。グループ活動で友だち（同性）ができたとする者の割合は59.5%であるから、友だちがほしいということで加入した者の、友だち（同性）ができたとする者の割合は他の理由の加入者に比べ非常に高いことがわかる。同様に、気分転換・娯楽を求めて加入した者のレクリエーション・娯楽を得たとする者の割合は62.4%、からだをきたえたいとする者の、からだがかきたえられた、とする割合は74.2%、仕事や日常生活に役だつ知識・技術を学びたいとする者の、その知識・技術を得た者の割合は56.4%、異性との交流・交歓を求め、それが得られた者、同じく56.4%、社会のために役だちたいという者で、社会のために役だったとする者73.1%、教養を高めることを求めた者で、教養の向上が図られたとする者56.6%、趣味のひろがりを求めた者で趣味がひろがった、とする者65.7%、いろいろな人と交流して生き方や行動のし方について学びたいとねがう者で、社会性が身についたとする者47.0%、生き方について学んだとする者49.7%である。いずれも、全体の者のグループ活動での達成度（効果）に比べ、著しくその割合の高いことが指摘できる。

これに対して、図7をみてみよう。図7は、「ただなんとなく」グループに加入した者のグループ活動で得たことがあるとする者の割合である。点線部分が全体であるので、それと比較して、いずれもが極めて低い割合であることがわかる。

これらのことから、グループ活動において、グループ加入の理由（目的）が明確である者のほうが、そうでない者より極めて得ることが多いということである。グループ活動に参加する場合、その参加目的を明確にすること、また、参加目的と活動内容が一致するグループに加入することが、活動効果

図6 グループ加入の理由とグループ活動で得たこと

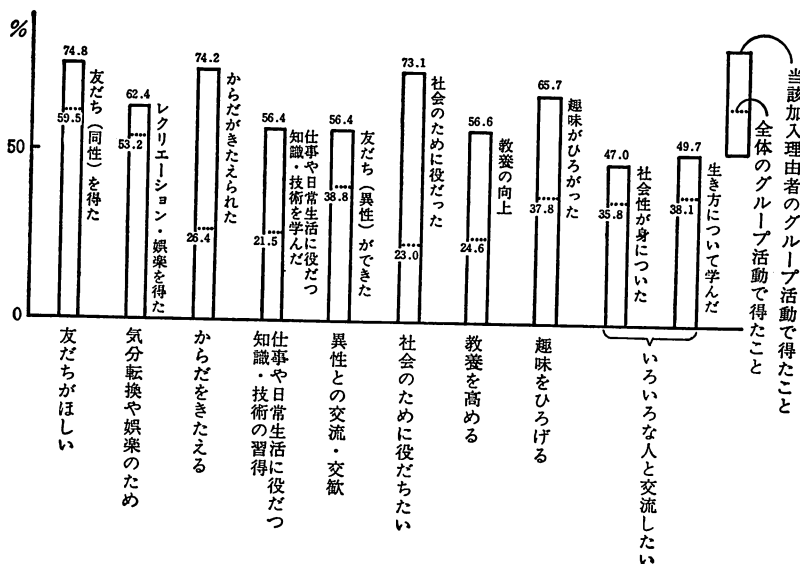
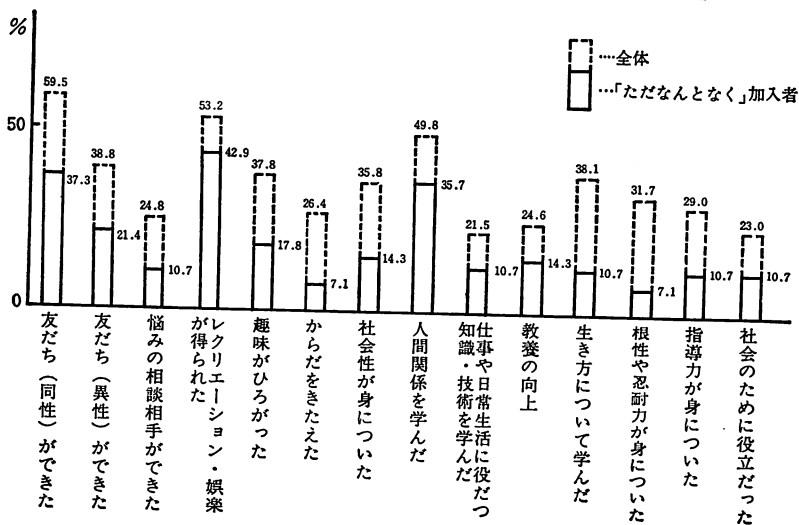


図7 「ただなんとなく」加入した者のグループ活動で得たこと



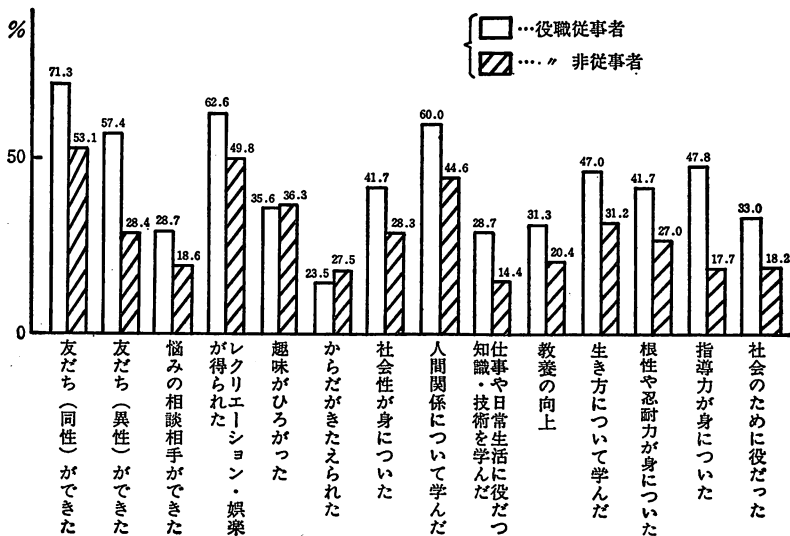
を得る重要なきめ手になるといえる。そして、ただなんとなく加入した者に対しては、グループの活動をよく理解させ、目的を保持できるよう、リーダーなり、まわりの者が配慮することも大切な措置といえる。

(五) 役職従事者とグループ活動の効果

図8は、役職従事者と非従事者のグループ活動で得たことがあるとする者の割合の比較である。まず、全体に役職従事者のほうが、役職非従事者よりグループ活動で得たことがあるとする者の割合が高い。役職非従事者のほうが割合の高いものは、趣味がひろがった、からだがきたえられた、の2項目だけであり、それもほとんど同じぐらいの割合である。

また、個人的なものと、社会的なものに分けて、その総和を求めてみると、役職従事者の社会的なもの和个人的なものは、339.9対270.0、これに対し、役職非従事者のものは、208.9対206.6である。役職従事者のグループ活動で得たことで、社会的なものが極めて高いことがわかる。役職非従事者の

図8 役職従事者・非従事者別グループ活動で得たこと



場合は、社会的なものと個人的なものとの比較では、ほとんどひらきがない。これを社会的なものと個人的なもの、それぞれに役職従事者、役職非従事者を比較してみると、社会的なものの差は131.0、個人的なものの差は63.4と社会的なもののほうにひらきが大きい。いずれにしても、役職従事者の社会的なものの達成度が高いといえる。

役職に従事することは、従事しない者に比べ、それだけ負担が大きくなるわけであるが、グループ活動の効果の面からみると、役職に従事する者のほうが効果大きいということなのである。役職に従事することにより、責任を自覚し、積極的に活動に参加するということ、そして、その結果として多くの効果が得られるということであろう。だから役職につけ、ということではないが、役職につくことは、決してマイナスでないということを理解すべきであろう。

さて、以上をまとめてみよう。グループ活動では、どのようなことを配慮すれば活動の成果が高まるかということである。

- ①は、グループ活動は30人位がもっとも効果をあげやすいということ。
- ②は、組織の範囲を限定せず、広く同好・同志の者を募るということ。
- ③は、明確な参加目的を各自が保持すること。
- ④は、少なくとも2～3年以上は活動すること。
- ⑤は、そして、役職にも積極的に従事していくこと。

があげられる。グループ活動に参加しようとする者、グループ活動の促進を図ろうとする者の心得となろう。（なお、グループ活動を効果あらしめる要素としては、これら以外にも存在すると考えられる。例えば、常時活動の場を有していること、指導者が存在すること、十分な活動資金を有していること等である。今回は、これらについての分析は割愛した）

注

- (1) 総理府「生涯教育に関する世論調査」（昭和54年）の学習率は31%，文部省

二 青年教育におけるグループ活動の効果 231

- 「定住圏における生涯教育システム開発に関する調査報告書」（昭和55年）の学習率は50.5%である。
- (2) 辻功「新しい社会教育観への転換の必要性」辻功，山本恒夫編著『現代社会教育概論』，昭和52年，第一法規，pp. 123～125)
 - (3) 個人学習の促進を説く辻功氏も，集合学習の効果を認めている。辻功「社会教育における集合学習の意義」（斎藤伊都夫，辻功編著『社会教育方法論』，昭和50年，第一法規 pp. 109～116)
 - (4) 伊藤琢「社会教育における集団活動——青年のグループ・サークルを中心に——」（前出『現代社会教育概論』，pp. 130～140)